

身体技法の教示と修得に関する一考察 — スケートボードのハウトゥ動画を題材に —

桑畑 洋一郎

要旨

本稿は、スケートボードのハウトゥ動画の分析を通して、身体技法の教示と修得がどのようになされるのか分析し考察することを目的とするものである。

結果、第1に、手本の提示は教える側の権威の確認のためにもなされていること、第2に、修得に必要となる曖昧な概念を教示する際に、教える側と教わる側の概念のすり合わせがなされていること、第3に、技法の修得が近づいてきた場面では、教わる側から修得のための新概念が提示されそれが教える側によって承認されること、の3点が析出された。

身体技法が教示され修得されようとする際には、上記のような方策が用いられながら、修得という目標に向けて実践が積み重ねられていくことが、本稿からは見えてきた。当然のように行われている身体技法の教示と修得は、実は複雑なやり取りからなされており、そうした複雑さを埋め合わせるための方策が用いられながら成立していることが示唆された。

1 はじめに

1.1 問題の所在

2021年に開催された東京オリンピックにおいて種目採用されたスケートボードは、日本人選手がメダルを獲得したこともあり、社会的に大きな注目を集めた¹⁾。こうした流れから、スケートボードを楽しむ人口が——短期的なものとなる可能性もあろうが——増えていくことも予想される。

さてそれではスケートボードとはどのようなスポーツなのか。詳細はまた後述するが、木製の板（以降「デッキ」と表記する）にタイヤ（以降「ウィール」と表記する）の付いたボードを用いて路面を滑る、両足を独特の技法で動かすことでボードと共にジャンプをする、縁石やベンチにボードや金属製の部品（以降「トラック」と表記する）をかけて滑るなどして楽しむスポーツである。こうした様々な技（以降「トリック」と表記する）を修得していくのはなかなか困難があり、例えば、フィールドワークを元にスケートボーダー（なお「スケーター」と表現する方が筆者の感覚に近い）ため、本稿では以降そう表記する）のエスノグラフィーを描いた田中研之輔も言うように（田中2016: 92-3）、ゼロから始める場合は何をどうすればいいのかわからないし、他のスケーターの動きを目にすることができたとしても、どうすればトリックができるようになるのかもわからないことが多い²⁾。野球やサッカーのように、技法を教えてくれる場や機会が身近にあればともかく、スケートボードにはまだそういう場は多くない³⁾。そこでスケーターは、トリックを修得するために、スケーターが多く集まる「スケートスポット」を探し他のスケーターに教えを乞うか、YouTube等動画投稿サイトでのハウトゥに頼ることとなる。

ところが、スケートスポットで他のスケーターに教えを乞うにしても、あるいは動画投稿サイトを通じてトリックの修得を目指すにしても、スケートボードは、両足を、それも日常あまりしない仕方で動かすことでボードを操るスポーツである。“投げる”“蹴る”のような相対的に日常的な動作であ

ればともかく⁴⁾、なかなか簡単に修得できない。またそれは、トリックを修得する側のみならず、それを教える側も同様である。あるトリックができる人間であっても、それを他人に十分に教示するには、自身がそのトリックをするために修得した身体の操り方——これを本稿では「身体技法」と呼ぶ——を他人と共有可能なものとしなければならない。

しかし実は、既修得の身体技法を他人に教示することはそれほど容易なことではない。注記もしたように、普段我々は当たり前様々な身体技法を用いて生活しているが、自身が日々何となく用いている身体技法を他人に教示することを想定してみると、意外と困難であろうことが分かる。人が用いている身体技法を他人に教示しそれを修得させるという過程においては、実は非常に複雑なやり取りがなされており、そうした複雑なやり取りを経て人々は他人から教示された身体技法を修得していくものなのである。

こうした、実は複雑なやり取りによって成立している身体技法の教示と修得を、スケートボードのハウトゥ動画を題材として分析するのが本稿の目的である。スケートボードを題材として選択するのは、第1に、それが社会的に注目を集めているスポーツであり、第2に、にもかかわらずトリックの修得に用いられる身体技法とそれを教示するための概念がそれほど社会的に共有されていないという両面があるからである。つまりは要するに、“多くの人が名前を知っているが、やり方は知らない”といったスポーツを選択することによって、そこでなされている身体技法の教示と修得の複雑さを可視化しやすいと考えたためである。

1.2 先行研究

1.2.1 スケートボードに関する研究

スケートボードを取り上げた研究としては、既に言及した田中研之輔（2016）のものがまず挙げられよう。田中は、スケーターたちと行動を共にしながら調査を重ね、都市におけるスケーターの生態を描いた。スケートボードという趣味が都市空間においてどのような意味を持ち、都市の成り立ちとどのように関係しているのか、スケーターがスケートボードを趣味としながらどのような生活を送っているのかといったことをリアルに描き出している。また田中の論考においては、トリックの習熟を目指したスケーターの日々の鍛錬の様子も描かれており、本稿で注目する身体技法の教示と修得と関連する部分も多い。とは言え、田中の論考は「技を盗む」といった独学的鍛錬に注目する傾向が強く、スケーター同士の身体技法の教示と修得⁵⁾の実際に注目は払われていない。本稿はこの点で、田中の論考において欠落した部分を埋めうるものでもあると言えよう。

また他にも、スケートボードが行われることによる都市の意味の再編に注目した、ボーデンの論考（Borden 2001=2006）や、サーフィンやパルクールと共にライフスタイルスポーツとしてスケートボードを捉え、その社会的な意味を考察したウィートンの論考（Wheaton 2013=2019）もある。ただしこれらも、スケートボードというスポーツの社会（学）的意味に注目したものであり、本稿とは、注目する題材は共通すれども着眼点においてやや異なる。

1.2.2 身体技法、あるいはその教示に関する研究

一方、本稿の主題との関連で参照すべきなのは、本稿のタイトルにも含まれる「身体技法」に関するモースの議論であろう。モースは、泳ぎ方や走り方のような日常的な身体動作を例としながら、それが社会的文化的に規定されており、またそれが社会的文化的に教育され伝達されていくことを指摘し、こうした、身体を動作させるための技法を「身体技法」とした（Mauss 1968=1976: 121-56）。

また、ポランニーの「暗黙知」も重要である。ポランニーは、「私たちは言葉にできるより多くのことを知ることができる」(Polanyi 1966=2003: 18)と述べ、そうした、「知ってはいるのだが説明することのできない事柄」(Polanyi 1966=2003: 25)をめぐる知識を「暗黙知」とした。論点先取ではあるが、まさに本稿で注目する身体技法もこうした「暗黙知」の1つであり、「暗黙知」を他人に教示するために言語化していくという、困難な事態が生じている場面の1つが、本稿で取り上げるハウトゥ動画であると言えよう⁶⁾。

また、本稿が「何かを教示する」という論点に接続するものである以上、教育学的な立場からの研究が関連するものとして挙げられよう。特にその中でも、生田久美子による「わざ言語」の研究が本稿の関心と近接する部分が多い。生田久美子は、主として伝統芸能の分野における「わざ」がいかんして伝達されているのか注目し、「わざ」の教示と修得に際して用いられる独特の言語を「わざ言語」と表現した。生田によると、「学習者の身体全体を通しての認識の質的变化を促すこと」を目標とするものとしての『「わざ」の修得』においては、「特殊な、記述言語、科学言語とは異なる比喩的な表現を用いた」言語が介在している(生田 2007: 93)。こうした言語こそ「わざ言語」であり、生田が注目した伝統芸能の世界のような、特定の人々によってなる世界において「わざ」が伝達される際に用いられることが多いものである。またこうした「わざ言語」は、他人に何かを伝達するという教育の手掛かりを提供するものでもありうる(生田・北村編著 2011)。さらに「こつ」とその対極にある「スランプ」を、認知科学の観点から——加えてプレイヤーとしての観点から——論じた諏訪正樹(2016)もある。

さらに、既に見てきた「わざ言語」の議論も踏まえ、ブルデューの「ハビトゥス」概念やエスノメソドロロジーのアプローチも取り入れながら理論的な考察を展開し、さらに主に武術を事例として身体技法を論じたのが倉島哲(2007)である。倉島によって、わざを修得しようとする者が他の主体の動きを見ながら、場合によっては模倣も通して徐々に修得していくといった形で、相互身体的にわざが理解され伝達されていくプロセスを分析し、技を通した人間と世界との関係性を考察した。

また、エスノメソドロロジーに依拠した論者たちによっても、身体技法をめぐる人々の実践に関する多くの分析が蓄積されてきた。サドナウは、ジャズ・ピアノの弾き方を、自らが教わりながらそこで行われていることを分析した(Sudnow 1978=1993)。西阪仰(2008)は、バイオリンの弾き方を教える／教わる場面に注目し、そこで用いられている方策を明らかにしている。五十嵐素子(2016)は、学校におけるプールの授業での教示をめぐるやり取りに注目し、学習がいかん達成されていくのかを分析している。また海老田大五朗(2016)は、柔道家のわざの掛け合いを元にして、わざが上手く成就する／しないという予期がどのようになされているのかを分析した。また他にも、カラオケをする際になされる日常的な相互行為の分析(吉川 2021)や、観光をめぐる人々が行っている実践の分析(秋谷 2021)のように、身体技法を用いた他者との相互行為やその伝達を伴った実践への分析が、エスノメソドロジストによって行われてきた。

本稿も、こうした流れを踏まえた上で、必要に応じてここまでに見てきた研究を援用しながら、スケートボードのハウトゥ動画における身体技法の教示と修得の分析を進めていくこととしたい。そうすることは、上記のような身体技法をめぐる研究に、従来注目されてこなかったスケートボードの身体技法の分析から得られる新たな知見を提供することになりうるものであり、また、やや話を大きくすれば、教える／教わるという実践そのものの考察への知見を提供しうるものでもある。本稿の意義はこうした点にある。

2 本稿で分析するものと分析方法

2.1 スケートボードをめぐる概説

スケートボードは、例外もあるが木製のデッキと硬質のウレタンでできたウィールを、金属製のトラックで連結することで構成されているものである。

ボーデンによると、現在の形のスケートボードが発明されたのは1970年代中頃である。ただし、車輪を付けた手作りのおもちゃ的な物は1920年代末から存在していたことが確認されており、こうしたものもスケートボードの起源と言えるかもしれない。現在とはやや形・サイズが異なるスケートボードは1950年代中頃に市販され始め、元々はアメリカ西海岸のサーフィン文化と結びついたものであった。現在とほぼ同じ機構を持つに至るのは上述の通り1970年代中頃からであり、その後はサーフィン文化とも、完全にではないが独立した文化として成立し、さまざまなスケートボードメーカーが誕生し世界中に広がっていった (Borden 2001=2006: 17-110)。また、元々のスケートボードの起源とも関連して、そもそもはスケートボード用に作られたわけではない街の器物——ベンチや花壇、階段など——をスケートボードのトリックのために用いる性質も強く、そうした街の意味を変容させる側面を有することが、カルチュラル・スタディーズや都市社会学から注目されてきた理由でもある。なお現在日本では、日本スケートボード協会 (AJSA、<http://www.ajsa.jp/>) に認定されたプロスケーターと、街でスケートボードを楽しむアマチュアスケーターとで文化が担われている⁷⁾。競技人口は明確ではない。

2.2 分析対象とする動画

本稿では、YouTubeにアップロードされたスケートボードのハウトゥ動画における、教示をめぐるやり取りを分析対象とする。必要に応じていくつかの動画を参照していくが、最も中心的に分析対象とするのは、2019年5月8日にチャンネル「ろびんとよし」がアップロードした、「苦手な360フリップに再挑戦！スケボー練習」(<https://www.youtube.com/watch?v=oeJKr8JWWZ4&>) である。この動画は、アマチュアスケーターの「よし」氏が、やはりアマチュアスケーターの岩澤史文⁸⁾氏に360フリップ(以降「トレフリップ」と表記する)⁹⁾を教わる動画である。この動画を主たる分析対象とするのは、教える／教わる場面が——もちろん編集や演出も入っているとは言え——それなりにそのまま記録されていることと、教える／教わる主体がともにアマチュアであることからである。後者の理由についてももう少し説明すると、教える／教わる主体がプロやプロに近いスケーターである場合、身体技法を教示するのが簡単に成立しすぎてしまうからである。身体技法の伝達がいかに困難で、にもかかわらずその中でいかに成立しているのかをじっくり見るために、アマチュア同士の教える／教わる実践に注目することが有効だと思われた。

2.3 記述と分析の方法

本稿では、1.2.2でいくつか参照したエスノメソドロロジーに依拠した身体技法の研究と同様、スケートボードのトリックを修得するための身体技法の教示をめぐる人々のやり取りを、主として会話と身振りに、また場合によっては字幕にも注目して分析していくこととする。その際、会話分析的なやり取りの断片の表記 (西阪 2008: xvii-xxiii) をベースに、本稿で注目したい会話と身振りに特化した形で省略したものを用いることとする。具体的には、映画の吹き替えと字幕の分析を行った岡沢亮 (2021) の論考と類似する表記法で、やり取りを記述し分析していくこととする。ただし本稿では、

スケートボードの専門用語や独自の概念が頻出するため、長い説明が必要なものは注に、短い補足で足りるものは断片の記述中に二重の丸括弧（（ ））で注記することとしたい。YouTubeの動画から断片を引用する際は、当該動画のどのあたりを引用しているのか、YouTube上の時間表示を用いて示すこととする。

3 分析

前置きが長くなったが、ここからはハウトゥ動画の分析を行っていきたい。なおその際、スケートボードにおける身体技法の教示と修得のために用いられているいくつかの方策を析出し、方策ごとに節を設けながら分析を進めていく。

3.1 「お手本」：権威付けとしての手本

動画内でトリックの教示が始まり、多少やり取りが重ねられた後に以下のような会話がなされる。

断片1 (1:38~2:07)

- 01 よし：すみませんちょっとお手本いいですか？
- 02 岩澤：いいですよ（（ボードをこぎながら））、できるかな
（（岩澤氏トレフリップをやってみせる））
- 03 よし：おおー
（（字幕：一発メイク¹⁰。さすが））

このやり取りは、よし氏が修得しようとしているトレフリップの「お手本」を、既に修得済みの岩澤氏が実演してみせる場面である。何かを教える／教わる場面においては、模倣するために、教わる側から教える側に対して手本や見本の提示が要請され、また実際に提示されることがしばしばある。このやり取りも同様のものであろう。

しかし一方で、このやり取りは単に手本・見本を提示するというものとは異なる意味もはらんだものであると思われる。同様のやり取りは動画の中盤でも複数回見られるため、それらを以下に列記してみたい。

断片2 (3:35~3:38)

（（岩澤氏トレフリップをやってみせる））

- 04 よし：うまー！（（字幕も「うまー！」））

断片3 (5:47~3:38)

（（岩澤氏トレフリップをやってみせる））

- 05 よし：おお
（（字幕：安定のメイク））
- 06 撮影者：さっきから1回もミスってないからね

断片4 (7:12~7:16)

（（岩澤氏トレフリップをやってみせる））

((字幕：4連続です))

以上のように、教える側が手本を提示する断片が、ハウトゥのプロセスにおいて何度も登場する。しかしこれらが、単なる手本の提示の意味しか持たないのであれば、上記の断片含まれているやり取りの意味が上手くつかめない。上記の断片2から4においては、「うまー」「おお」「さっきから1回もミスってない」「4連続」といった、“きちんとできること”を確認する語が何度も登場する。こうした語は、岩澤氏がたまたまトリックを成功したわけではなく、トリックを自らのものとして修得できていることが、よし氏（と撮影者）によって確認され続けている。

しかしながらこれはよくよく考えてみると不思議な事でもある。そもそもよし氏が岩澤氏に教えるを乞うたのは、岩澤氏が習熟していることが自明であるからである。習熟していない相手からトリックを教わることはありえない。「うま」いことや、「ミス」しないで「連続」で成功できるのは当然のこととして前提とされているはずである。「一発メイク」は当然のことであろう。

ではなぜこれだけ何度も習熟が確認されるのか。これは、手本の要請と提示が、模倣のためのみならず、それに加えて、教える側が教えるに足るほどに習熟していることを確認する意味も含まれているからであろう。つまりは、教える側に、“教える側として権威があること”の確認が、こうした、複数回の手本の提示によって行われていると思われる。またおそらく、「お手本」の要請が権威の確認でもあることを理解しているからこそ、断片1の02で岩澤氏は「できるかな」と、心理的重圧があることを謙遜混じりで表現しているのであろう。

3.2 「しゃくり」：曖昧な概念のすり合わせ

続いては、「しゃくり」という概念に注目していくつかの断片を取り上げ分析していきたい。トレフリップに限らず、スケートボードでは横回転をかけるトリックをする際に「しゃくり」という身体技法の表現が用いられることがよくある。動画そのものの分析から超え出てしまうものの、これは筆者なりに説明すれば、ボードを、地面と水平方向に力を入れて足で蹴ることを指す場合も、地面と水平・垂直両方向に力を入れて蹴ることを指す場合もある。つまりは、異なる力の入れ具合／力の配分具合が必要となる身体技法が、同じ概念で表現されている¹¹⁾。そのためこの「しゃくり」の教示と修得には多くの労力が必要となることが多い。本稿が分析対象とする動画でも、「しゃくり」の確認にかなりの時間が費やされている。

断片5 (1:11~1:51)

08 よし：前足キャッチ¹²⁾は全然できるんですよ

((よし氏トレフリップをやってみるが失敗))

09 岩澤：しゃくりだと思います、((止まったボードに乗りながら)) 乗りにいかない時は、こうやって ((ジャンプのためにしゃがみ込むのを実演しながら)) 蹴って、後側蹴ってるんですけど、((「乗りにいく」¹³⁾場合は)) 重心が前に行き過ぎて、((手でボードを回転させ、理想の回転を示しながら)) 踏んじゃってるんです、しゃくれてないです。

10 よし：あー

11 岩澤：軸 ((体の重心)) を後ろにして、NIKEサイン ((NIKEのロゴマーク)) を描くように ((手で描きながら)) しゃくる

- 12 よし：はいはいはいはい
 ((よし氏トレフリップをやってみるが失敗))
- 13 岩澤：((止まったボードに乗りながら)) 僕も最初できなかつたときはつま先を立てて、プレッシャーかけたら一気に回る ((ボードを回転だけさせてみる))
 ((よし氏トレフリップをやってみるが失敗))
- 14 よし：あ、ちょっといった ((回った))、つま先を立てるのか、ちょっとおおげさにやるみたいな
- 15 岩澤：((うなずく))

以上の断片では、「しゃくり」をめぐって、理想の「しゃくり」に近い動作とそうでない動作とが示されている。トレフリップを修得する上で必要な「しゃくり」は、よし氏が現在やっているような、「重心が前に行き過ぎ」ていて「踏んじゃ」う行為とは異なる。「軸を後ろに」置き「NIKEサインを描くように」足を動かすことが理想の「しゃくり」であり、それがまだできていないがために理想的な回転ができない。また岩澤氏自身がトレフリップを修得しようとしていた初期には「つま先を立てて」「プレッシャー」をかけようとしてボードを蹴ることで理想の「しゃくり」に近づくことができたと言われる。なお「プレッシャー」とは、この断片を引用する前に少し触れた、「しゃくり」の多義性を参照しての発話であると思われる。「プレッシャー」とは、ボードを地面と水平・垂直両方向に足で蹴ることを指す別の概念であり、すなわち、水平方向のみに蹴るタイプの「しゃくり」ではないことがここで岩澤氏によって示される。

一方よし氏も、岩澤氏に提示された概念を踏まえ、それを意識して実演してみようとする。そうしたところ、本人の感覚としてはそれまでよりも理想に近い回転になった。岩澤氏が提示したものと同様の「つま先を立てる」ことの有効性が共有されたことで理想に接近できたことが「ちょっといった」との発話によって示されている。ただしここで、岩澤氏が提示した概念だけではなく、「おおげさにやる」というよし氏独自の「しゃくり」概念も登場する。岩澤氏自身はこのような表現は用いていない。これは後の節で見ることとも重なるが、「しゃくり」のような曖昧な概念が示された際に、教わる側がそれを自身の概念で言い換えることで、自分のものとして理解しつつあることを教える側に提示する行為であると思われる。“あなたの教えてくれたことを私はこのように理解しましたがそれは妥当ですか”と示し確認しているわけである。また加えて、その言い換えが妥当であることが、岩澤氏のうなずく行為によって正当化される。

こうした、特定の身体技法を指す曖昧な概念——ここで焦点化されるのは「しゃくり」であるが——は、ハウトゥ全体を通して、トリックが修得できたと認められるまで何度も確認され続ける。以下にそうした断片を引用してみたい。

断片6 (3:05~3:17)

- ((よし氏トレフリップをやってみるが失敗))
- 16 よし：なんでフリップ入んない ((縦回転が入らない)) んだろうな
- 17 岩澤：しゃくりっす
- 18 よし：しゃくり？
- 19 岩澤：前に ((進行方向側に)) しゃくるイメージなんで、((しかしよし氏の「しゃくり」は)) なんかこう ((進行方向逆側に足を動かし蹴りながら)) やってるだけなんで、前にしゃく

るイメージでやると

断片7 (4:30~4:46)

- 20 岩澤：テール ((ジャンプする際にボードを蹴る側の端のこと)) が地面につけてる時間が長い感じがします、後足で押してる感じがします
- 21 よし：あー、じゃあもうほんとタツテ ((手を「しゃくる」形で動かしながら)) 一瞬、瞬間的に
- 22 岩澤：((足でボードを回転させながら)) 今もう押してる感じなんで、滑ってる ((ボードが地面を)) 感じなんですけど、もっと自分が跳びながら ((手を「しゃくる」形で動かしながら)) サツテ

断片8 (5:23~5:42)

- 23 岩澤：((ボードに乗りながら)) やっぱこれっすね、キーは、つま先でこのところを ((ボードの蹴る部分を手で押しながら))、この ((進行方向後ろ側の)) ウィールに向って ((手でボードを回転させ、理想の回転を示す))
- 24 よし：後足 ((で地面を蹴るときに)) 結構力入れる？
- 25 岩澤：もう9割後足ですね
- 26 よし：へー、じゃあ結構気合い入れて後足に力入れるんだ
- 27 岩澤：もうめっちゃつま先で、こう ((ボードに乗って足でボードを蹴ってみるそぶりをしながら))
- 28 よし：あー
- 29 岩澤：スナップで ((足首のスナップで足先を動かす))

既に断片5において「ちょっといった」にもかかわらず、よし氏は理想の「しゃくり」が理解できておらず、またそのことを見ている岩澤氏も感じ取っている。だからこそ断片6~8では——また引用していないものの、これ以降もこの動画中に同様の断片は何度かあるが——「しゃくり」の意味するところが何であるのかが確認され続けることとなる。

その際、断片5では用いられていなかった「前にしゃくるイメージ」「このウィールに向って」のような概念が登場することでよし氏が修得できていないと思われる「しゃくる」の理想的な方向が示され、さらに「地面につけてる時間が長い」「押してる感じ」「滑ってる感じ」という問題点が発見され「サツ」「9割後足」「スナップ」といったそれまで用いられてこなかった概念が使用されることで、「しゃくり」の理想的な力具合も示されることとなる。

このように、スケートボードのトリック修得に必要な身体技法の伝達は、「しゃくり」のような曖昧な概念——これがいわゆる「わざ言語」であろう——で表現されることがあり、スケートボードをする者同士でも共有が困難となることもしばしばある。そこでこうしたあいまいな概念の曖昧さを埋めるために、別の概念が持ち出され、教える側と教わる側との間ですり合わせが行われていくこととなる。すり合わせが成功に向っているかどうか、教わる側の修得度合いは、教わる側がトリックを実演することで都度確認され、すり合わせが不十分な部分の曖昧さを埋めるために、さらなる新しい概念が用いられていくこととなる¹⁴⁾。また、前節で指摘したように、教える側に教える側としての権威があることはすでに確認されている。そのため、教示に用いられる概念が曖昧なものであろうとも、

教わる側は教える側の理想とするものが何であるのか、別の概念を提示しながらすり合わせをしようとし続けるのであろう。

3.3 「スピード」と「音」：教わる側による概念の発見と、教える側の承認

ハウトゥが続けられていく中で、トリックの修得が近づいてきたと感じさせられる場面もしばしば出てきて、そうした際には、教える側と教わる側の双方によって“何が良かったのだろうか”と確認がなされることがある。

断片9 (7:56~8:17)

((よし氏トレフリップをやってみるが失敗))

30 よし：あ、ちょっと、まあまあ回ったね ((理想の回転に近いものになった))

((岩澤氏両手で「グッド」とサイン))

31 よし：スピード出した ((スケートボードの進行速度を速めた)) から？

32 岩澤：スピード大事です、スピードに任せる

33 よし：任せる

((よし氏トレフリップをやってみるが失敗))

34 岩澤：おお

35 よし：回った確かに、確かに

これは、トリックに失敗はしたものの、何かの拍子に理想の回転に近づいた——つまり苦勞してきた「しゃくり」が理想に近づいた——と教わる側のよし氏が感じ、それを岩澤氏に伝え確認するやり取りである。ここではまず、「スピード出したから？」と、理想に近づいた理由を教わる側のよし氏が自ら見つけ出し、それを疑問形で教える側の岩澤氏に投げかけている。ただしここまで、トリック修得において鍵となる「しゃくり」が教示されてきた場面において「スピード」という概念は全く出てきておらず、少なくとも動画上ではここで初出である。これは教わる側から新規に提示された概念である。

同様の場面は、トリックの修得がさらに近づいてきた、動画終盤にも見られる。

断片10 (8:44~9:55)

((よし氏トレフリップを何度かやってみるが失敗))

((字幕：だんだんしゃくりの音になってきた))

((よし氏トレフリップを何度かやってみるが失敗))

((字幕：あと一步))

((よし氏トレフリップに成功))

((字幕：ついにメイク、続けて練習))

36 よし：でも今自分でやっててね、テールのしゃくりの音が、ちゃんとできてるっていうのが、ちゃんと自分で分かるようになりました

ここでは「音」という初出の概念が用いられ、それが理想に近い「しゃくり」が修得できていることと目安とされている。なおもちろんこの「音」の概念については、断片7でよし氏が用いた「タッ」

や、岩澤氏によって用いられた「サッ」という概念を、よし氏が言い換えたものでもあると思われる。とは言えしかしながら、「タッ」「サッ」は、いずれも手の動作を伴って発話されたものであることから分かるように、擬態として用いられた概念である。実際に聞こえた「しゃくりの音」に直接変換できるものではない。したがってこれも、完全にではないだろうが、教わる側から新規に提示した概念であると思われる。

さらに断片9に戻ると、もう1点重要なことが見えてくる。それは、初出概念が、初出であるにもかかわらず、教える側からすんなりと承認されていることである。「スピード」概念が提示された際、岩澤氏は、「スピード大事です」と、それまで自分が教えてきた概念には含まれていないものであるにもかかわらず、修得の鍵となりうることを承認している。さらにこうした初出概念の妥当性は、やり取りを通してより堅牢なものとして築き上げられていく。断片9の34から35のやり取りでは、トリック失敗にもかかわらず教える側の岩澤氏が「おお」と驚嘆したことで、「スピード」という初出概念への再承認がなされ、またさらに、よし氏からも「回った確かに」と妥当性が再確認される。

教える側と教わる側という関係性は確固としたもののように思えるが、教わる側が修得に近づきつつある場面においては、修得のための新たな概念を教わる側が発見・発信し、教える側がそれを承認するという実践がなされることもある¹⁵⁾。

4 考察

本稿では、スケートボードのハウトゥ動画を元にして、身体技法の教示と修得に際してどのような方策が用いられているのか分析してきた。結果、第1に、手本の提示が教える側としての権威の確認のためにも用いられていること、第2に、修得に必要な曖昧な概念を教示する際に、教える側と教わる側の概念のすり合わせがなされていること、第3に、主に修得に近づいてきた場面では、教わる側から修得のための初出概念が提示されそれが教える側によって承認されること、の3点が析出された。

身体技法が教示され修得されようとする際には、上記のような方策が用いられながら、修得という目標に向けて実践が積み重ねられていくことが、本稿からは見えてきた。さてそれでは、こうしたことはいかなる知見を提供してくれるのか。

第1の方策は、サックス (1972) の言うところの成員カテゴリー装置が、身体技法の教示と修得をめぐる場において用いられている例として考えられよう。すなわち、教える側／教わる側というカテゴリー化の妥当性が手本の提示によって確認され、それによって教える／教わる関係が秩序立ったものとして成立することとなっている。本当にこの人は教える側としてふさわしいのか、自分は教わる側としてこの人に教わるのが妥当なのかといった、カテゴリーをめぐる疑義が、手本の提示という実践を通して解消されていくこととなっている。

第2の方策は、個人が有する「わざ言語」同士が参照させられ合い、それによって身体技法の修得に向けてより適切な「わざ言語」が定められていく過程であると考えられる。生田らは、身体技法の修得において、そのために必要な「動感と『わざ言語』が対応付け」(生田・北村編著 2011: 81) されがちなことを指摘したが、教わる側が「動感」すなわち身体技法を修得するために、教える側から提示された未保有の「わざ言語」と現有の「わざ言語」との近縁性を確認していこうとする方策が、これであろう。

第3の方策については、やはりサックス (1988) が提示し、五十嵐素子の論考でも分析された「測定システム」と同様のものであると思われる。五十嵐の論考においては、水泳を学ぶ子どもたち

が水に潜る練習において必要とされる潜る基準を「ここまで」といった形で示し合い理解しながら、徐々に必要な程度を修得していく様子が分析されている（五十嵐 2016: 182-90）。この点において、「スピード」や「音」が、「しゃくり」の修得具合を測定する「測定のシステム」として用いられているのは、本稿で分析した事例でも同様であろう。しかし一方で、本稿の事例において提示された「スピード」や「音」といった「測定のシステム」が、教える側からではなく教わる側によって創出され発信されたものである点に本稿の事例は特異性を有するとも思われる。これはおそらく、注15で書いたようなこととも関連して、スケートボードが元来“人それぞれ”的なスタイルの独自性を重視するスポーツであるため（Borden 2001=2006: 152-74）、身体技法の修得も定型的かつ制度的なものが定まりにくいことにも起因しているのであろう。スケートボードのような性格を持つスポーツに関わる身体技法の伝達とは、第1の方策で見たように権威付けもされつつも、教わる側が「測定のシステム」を設定することも可能となるような関係性が成立していると思われる。

5 おわりに

本稿では、以上のように、従来の、主に教示をめぐる場における相互行為の分析を行ってきた先行研究においても指摘されてきた方策が、スケートボードのトリックの修得をめぐる身体技法の教示においても用いられていることが明らかとなった。また一方で、スケートボードというスポーツの“人それぞれ”的な性格が作用して、「測定のシステム」の設定をめぐる教える側と教わる側の役割の点等もなされているという新たな知見も得られた。こうしたことは、スケートボードという、そこで何が行われているのかそれほど分析されてこなかったスポーツを分析対象としたから得られたものであると思われる。こうした発見ができた点に本稿の意義はあろう。

とは言え本稿には課題も残る。最大の課題は、分析対象としたものが、YouTubeに投稿された動画であるという点である。YouTubeに投稿された動画である以上、本稿で分析した動画は、教える側の岩澤氏が教わる側のよし氏に教えるだけのものではなく、教える／教わる状況を視聴者に見せるという性質も帯びている。この点を本稿では考慮せず分析を進めてきたが、こうした点も考慮すべきであろう。したがって今後は、「視聴者」という存在も視野に入れた分析を行うか、あるいは筆者がスケートボードをしている場において実際になされている実践を観察するか、どちらかの方法によってより詳細な分析を行うこととしたい。

謝辞

山口大学国際総合科学部の秋谷直矩先生には、本稿で分析に用いたハウトゥ動画を一緒に見ていただき、分析の糸口を考える機会をいただいた。この場をお借りして御礼申し上げたい。

[注]

- 1) オリンピック種目に採用されることの是非の判断はここでは措く。
- 2) なおこの箇所では田中は、「パークには指導者や他のスポーツでみられるようなコーチは存在しない」（田中 2016: 94）としているが、確かにスケートボードにはコーチのような公的指導者はいないにせよ、そうした役割を担う上級スケーターは、スケーターが多く集まる場には大抵いるものであるし、トリックの伝達と修得を口頭で行うための方策をそれぞれに持ち合わせていることも多い。実際、同書で引用されている他のスケーターとのやり取りにおいても、トリックの修得を目指した教示が当たり前のようになされている（例えば（田中 2016:92, 95）など）。

- 3) スケートボードを販売しているショップがスケートボードのスクールを開催することや（大手ではムラサキスポーツがスケートボードも含めた各種スポーツの教室を開催している）、あるいは任意団体等有志がスケートボードの教室を開催することもある（山口県だと山陽小野田市にLHFという団体がある<https://ameblo.jp/lhf-2015-3/>）。
- 4) “投げる”“蹴る”といった動作とそのための身体技法の修得が相対的に容易であるようにここでは書いているが、あくまでもこれは修辭的なものであり、実際はよくよく考えると“投げる”“蹴る”の修得もそれほど単純なものではない。“投げる”という動作そのものを知らない人に、どうやって“投げる”を教えればいいのか想像してみるとすぐに理解できるであろう。さらに“投げる”“蹴る”に美しさや強度（遠くに投げるなど）を出すという観点が入ってくれば、なおさら事態は複雑になる。しかしそうした複雑な事態を、日常的なレベルから本格的にスポーツをするレベルまで、人々は当たり前に行なっているし、当たり前他人に教示している。スポーツに限らず、例えば箸の使い方や、さらに言えば言葉の選択など、日々当たり前何となくやっている、いつの間にか修得している身体技法が日常には多く潜んでいる。しかしそれらはどのようにして日々運用されているのか。言語化しようとしてもなかなか難しいものであろう。本文でも書いた通り、こうした、当たり前を当たり前たらしめている方策を、スケートボードのハウトゥ動画を通して明らかにしようとするのが本稿の狙いである。
- 5) 実際それは日常的に行なわれているものであり、まったくスケーターの規範に抵触するものでもないことは、YouTubeに大量に挙がっているハウトゥ動画が示しているし、スケートボードを高校生の時から断続的にやってきた筆者の感覚からしても「別に普通にトリックを教え合うものだけだな」というのがある。
- 6) ただし本文中で後に参照する西阪仰は、ポランニーの「暗黙知」の議論には混乱があると指摘している（西阪 2008: 22-7）。
- 7) またもう1つ、日本スケートボーディング連盟（JSF、<https://japanskateboardingfederation.jp/>）という団体も存在し、大会の開催を行っているが、AJSAとの関係や差異は明確にはよく分からない。JSFの方は日本オリンピック委員会に加盟していることから、公的競技としてのスケートボードを担うのがJSFで、実際のスケートボード文化を担うのがAJSAという住み分けがあるようにも思われる。加えて、同じスケートボードでも、本稿で分析対象とするハウトゥ動画に出てくるものとは少しトリックの傾向が異なるスケートボード文化を担う、日本フラットランドスケートボード協会（JFSA、<https://jfsa.biz/>）もある。
- 8) 通称「シモン」氏。岩澤氏も「MDAskater」名義でスケートボードに関する動画をアップロードしている（https://www.youtube.com/channel/UC_C37Xehj2cA8ldquUxDtQw）。
- 9) トレフリップ、もしくはサブロクフリップと日本では呼ぶことが多い。雑に表現すれば、ジャンプしながらスケートボードを縦横ともに360度回転させるトリックを指す。それなりに難易度が高く、スケートボードを始めて、徐々にトリックができるようになってきたスケーターが躓くことが多いトリックでもある。
- 10) トリックを（完全な形で）成功すること。
- 11) なおこれはかなり簡略化した説明で、実際はもっと複雑な話になる。特にトレフリップに関しては、同様の技法を「めくる」と表現するスケーター（<https://www.youtube.com/watch?v=241hhj9IqvU>）もいれば、「弾く」「放る」と表現するスケーター（<https://www.youtube.com/watch?v=VOFF3cNuk3Y>）もいる。さらに言えば「しゃくらない」と言うスケーター（<https://www.youtube.com/watch?v=Kwbmy>）

B1-PYU) までいて非常にややこしい。

- 12) スケートボードは両足を動かすことでトリックを行う。「前足」とは一般に、ジャンプ系トリックをする際に、ボードを地面に向けて蹴る足とは逆側の足のことを指す。「前足キャッチ」とは、その「前足」だけをボードに乗せることを意味し、ジャンプ系トリックを段階的に練習する過程で、意図的に行なわれる行為を指す。両足で乗ってトリックは成立するのだが、「前足キャッチ」は、まだ両足では乗れない段階において、ボードの動きを確認しつつ制御しながら、最終的に乗るイメージを獲得するための練習である。
- 13) 「前足キャッチ」とは異なり、両足で乗ろうと意図してジャンプする行為。「前足キャッチ」は意図的にわざと前足のみ乗せ、後足は地面につくのだが、それから一段階進んだ練習方法である。
- 14) また関連して、身体技法をめぐる曖昧な概念が教示される際、別の身体技法を類推させる方策が取り入れられることもある。これは別のスポーツで身体技法が教示される際にもよく見られることで、例えば、スピードスケートの技法を教示する文脈で「スピードスケート以外でも運動の感覚、例えば（中略）ほうきで掃くという経験がないとその経験が伝わらない」（生田・北村編著 2011: 330）と語られるように、既知の身体技法が引き合いに出されることで、曖昧な概念の教示を容易にする方策が取られている。スケートボードの他のトリックでも同様に、プロスケーターの米坂淳之介氏がスラッピーkというトリックを修得するために知人のユウ氏に必要な身体技法を教わるハウトゥ動画（https://www.youtube.com/watch?v=xsYQr_u8y2Q）では以下のような断片が見られる。

断片11 (4:35～5:00)

- 37 ユウ:真正面からでかかんない ((思った通りの位置にボードが移動しない)) 人は、ちょっとアーリーアップっぽく
- 38 米坂: はいはいはいはい
- 39 ユウ: ちょっと巻き込んでいくと、潰し ((ボードの傾き)) が大きくなんじゃん
- 40 米坂: あーなるほどね、なるほどね、あー、そっかそっかそっか
- 41 ユウ: だからこれほんと、ウォールとかああいうの
- 42 米坂: それいいね、より自然な動きになるね
- 43 ユウ: で、頭の動きとしては、ここにちっちゃいアールがあるって思うと
- 44 米坂: はいはい
- 45 ユウ: そこに、アールに沿わせて上半身もみたいなさ

「アーリーアップ」「ウォール」「アール」は、ここで引用した断片で教示されているトリックと直接は関係しない別のトリックもしくは別のスケートボード用器物の名称なのだが、そうしたものが引き合いに出され教示されることで、スラッピーkの修得を導こうとされる。こうしたことは、第1に教える側が類推可能な、引き合いに出すべき他の身体技法に関する知識を有しており、第2にそれが教わる側にも共有されており、第3に教わる側が共有しているであろうことを、教える側が認識していることによって成立している。なお実は、これと同様のやり取りは、本稿で中心的に分析した岩澤氏とよし氏のものにも見られる。

断片12 (2:49～3:04)

- 46 よし: え、最初360ポップ ((ボードを360度横回転させるトリック)) やった?

47 岩澤：やってないです、最初フェイキートレ（（体の前後を入れ替えた上で、進行方向前側の足で蹴るトレフリップ））やって、その後にレギュラートレ（（現在よし氏が修得しようとしているトレフリップ））しました

このやり取りでよし氏が「360ポップ」というトリックを練習したかどうか岩澤氏に尋ねているのは、トレフリップと同様に360度の横回転が入る「360ポップ」との類推可能性を確認し、それによって理想の「しゃくり」の手掛かりを得ようとしているためだと思われる。しかしそれに対して岩澤氏が「やってないです」と回答したことで、360ポップでの類推不可能性をよし氏は悟り、やり取りが終了することとなる。よし氏も、ユウ氏と米坂氏と同様、他のトリックの身体技法を類推的に用いて、現在修得しようとしている身体技法の修得に近づこうとしており、類推可能性を岩澤氏に確認しようとしているのだが、それが失敗したのがこの断片であろう。おそらくではあるがこの失敗は、岩澤氏とよし氏との間で、引き合いに出すべき他の身体技法をめぐる知識の共有が充分になされていないために生じたものではないかと思われる。もう少し共有がなされていれば、ここから他のより類推妥当性の高いトリックが提示され、「むしろこっちのトリックの方が近い」といった形でやり取りが継続していった——おそらく「フェイキートレ」の提示はそうした趣旨だとも思われるが、よし氏はその提示に乗ってこなかった——のであろう。

15) これは推測交じりではなるが、こうした実践がなされるのは、トリックの修得さえなされればこの場の目的は達成されるのであり、修得のために用いられた概念が何であろうと問題がない、という判断が働いているためであろう。また関連して、スケートボードのハウトゥ動画では、教える側が“これはあくまでも自分のやり方であって万人に共通するものではなく人それぞれ”と留保を付ける場面が頻繁に見られるのも興味深い。例えばそれは、プロスケーターの米坂淳之介氏が、キックフリップを教える動画 (<https://www.youtube.com/watch?v=hLPpACXr4xQ>) においても同様に、「キックフリップ1つ言ってもいろんなキックフリップがあって、下に蹴る人だったり、前に蹴る人、上の方に引き付けてそのまま抜く人、まあ何通りかいると思うんだけど、全てキックフリップです。ただ、プロの人がやってるキックフリップっていうのを今回教えようと思ってるんで」(3:07~3:55) と、どのような形であれ「全てキックフリップ」と承認する。同様に「（（キックフリップをする際の足の））その動きっていうのがどういう動きなのかって言うと、これはまた俺の独特の説明の仕方なんだけど、オーリーワンフットっていう技があるんだけど、そのオーリーワンフットの引き付け方と、（（キックフリップの））前足の蹴り切り方がめちゃくちゃキックフリップに似てて」(4:55~5:10) と、「俺の独特の説明の仕方」であり、万人に共通するわけでないことが明示されている。

とは言え同時に、前者の発話では自分が教えているものが「プロの人がやってる」ものであるという仕方で、権威付けを行っているのも、本稿3.1との関連で興味深いし、後者の発話では「オーリーワンフット」という別のトリックが類推のために用いられているのも、注14との関連で興味深い。

[文献等]

秋谷直矩, 2021, 「観光する時間と友人との時間——観光実践のエスノメソドロロジー」秋谷直矩・團康晃・松井広志編, 『楽しみの技法——趣味実践の社会学』ナカニシヤ出版, 170-199.

Borden, Iain, 2001, *Skateboarding, Space and The City: Architecture and the Body*, Berg Publishers: London.

- (=2006, 齋藤雅子・中川美穂・矢部恒彦訳, 『スケートボーディング、空間、都市』新曜社.)
- 海老田大五朗, 2016, 「柔道家たちの予期を可能にするもの」酒井泰斗・浦野茂・前田泰樹・中村和生・小宮友根編『概念分析の社会学2——実践の社会的論理』ナカニシヤ出版, 259-278.
- 五十嵐素子, 2016, 「『教示』と結びついた『学習の達成』——行為の基準の視点から」酒井泰斗・浦野茂・前田泰樹・中村和生・小宮友根編『概念分析の社会学2——実践の社会的論理』ナカニシヤ出版, 177-194.
- 生田久美子, 2007, 『新装版コレクション認知科学6 「わざ」から知る』東京大学出版会.
- 生田久美子・北村勝朗編著, 2011, 『わざ言語——感覚の共有を通しての「学び」へ』慶應義塾大学出版会.
- Mauss, marcel par Lévi-Strauss, Claude, 1968, *Sociologie et Athropologie; Précédé D'une Introduction a L'œuvre*, Paris: Presses Universitaires de France. (=1976, 有地亨・山口俊夫訳, 『社会学と人類学Ⅱ』弘文堂.)
- 西阪仰, 2008, 『分散する身体——エスノメソドロジ的相互行為分析の展開』勁草書房.
- 岡沢亮, 2021, 「いかにして『異文化』のユーモアを理解するのか——コメディ映画鑑賞と字幕・吹き替えの技法」秋谷直矩・團康晃・松井広志編, 『楽しみの技法——趣味実践の社会学』ナカニシヤ出版, 125-148.
- Polanyi, Michael, 1966, *The Tacit Dimension*, Routledge: London. (=2003, 高橋勇夫訳, 『暗黙知の次元』筑摩書房.)
- Sacks, Harvey, 1972, “An Initial Investigation of the Usability of Conversational Data for Doing Sociology,” Sudnow, D. ed., *Studies in Social Interaction*, New York: Free Press, 31-74. (=1997, 北澤裕・西阪仰訳「会話データの利用法——会話分析事始め」『日常性の解剖学——知と会話』マルジュ社, 93-173.)
- , 1988, “On Members’ Measurement Systems”, *Research on Language and Social Interaction*, 22: 45-60.
- Sudnow, David, 1978, *Ways of the Hand: The Organization of Improvised Conduct*, Harvard University Press: Cambridge. (=1993, 徳丸吉彦・村田公一・ト田隆嗣訳『鍵盤を駆ける手——社会学者による現象学的ジャズ・ピアノ入門』新曜社.)
- 諏訪正樹, 2016, 『「こつ」と「スランプ」の研究——身体知の認知科学』講談社.
- 田中研之輔, 2016, 『都市に刻む軌跡——スケートボーダーのエスノグラフィー』新曜社.
- Wheaton, Belinda, 2013, *The Cultural Politics of Lifestyle Sports*, Routledge: London. (=2019, 市井吉興・松島剛史・杉浦愛監訳, 『サーフィン・スケートボード・パルクール——ライフスタイルスポーツの文化と政治』ナカニシヤ出版.)
- 吉川侑輝, 2021, 「『歌いたい曲がない!』——カラオケにおいてトラブルを伝えること」秋谷直矩・團康晃・松井広志編, 『楽しみの技法——趣味実践の社会学』ナカニシヤ出版, 149-169.